
境界線の上で見つけた私

同志社国際高等学校2年 庄 凜 珂

「私はいつも2つの文化の境界線の上にいた。」

あれは私が中国で15年間暮らしていた頃の話。

中国の学校で、私はクラスでただ一人、二つの国文化を持つ子どもだった。朝礼で名前を呼ばれると、誰かが私の顔をちらりと見るのがわかる。友達は悪気なく「外国の血が混じってるんだよね」と言う。それはちょっと自慢みたいに言われるときもあったけれど、なぜか胸の奥が少しだけざわついた。

大きな教室の中で、私はみんなと同じ制服を着て同じ授業を受けていたけれど、どこかで「少し違う」と見られていることをずっと感じていた。しかし、私にとってはそれが普通だった。実際の私は、日本に通ったこともなく、日本の漢字も全部は知らなかった。放課後、友達に小さなノートを差し出されて、「この日本語って何?」と聞かれるたび、私はうまく答えられず、心の奥がざわざわした。

ある日、休み時間に友達の一人が笑いながら言った。「本当に日本人なの?」

教室の窓から青空がまぶしくて、私は机に顔を伏せた。頬を伝った涙が、机の上に小さな水たまりを作った。光があたって、その涙は小さな湖みたいにきらきら搖れていた。「私は何者なんだろう。」涙を見つめながら、子どもだった私は心の中でそうつぶやいた。でもそのとき、その小さな湖が、私の中に溜まっていた言えない思いをそっと流してくれた気がした。「もっと知りたい。もっと伝えられる自分になりたい。」机の上にできた小さな湖は、私の小さな決意の始まりだった。

私は自分で日本語の本を読むようになった。図書室にあった子ども向けの日本の絵本を、意味が分からなくても一ページずつ声に出て読んでいた。母に頼んで、家でも簡単な漢字と一緒に書いてもらった。ノートには何度も同じ文字が並んでいたけれど、それを眺めていると少しずつ自信が生まれてきた。そんな私に、ある日母が何気なく言った。「高校からは日本で勉強してみない?」部屋で宿題をしていた私に向かって、母はそう言った。それは突然の提案だったけれど、母の声は不思議と優しくて、私の中にはいた小さな不安をそっと溶かすようだった。もちろん、すぐに行きたいと言えるわけではない、長く住んだ中国を離れて、日本の学校に通うなんて、正直怖かった。でも、どこかで「違い」を隠そうとしていた自分に疲れていた私は、母の言葉に背中を押されるように決めた。「日本で勉強する。それで何かが変わるかもしれない」と思った。

高校の入学式の日。

新しい制服に袖を通したとき、私は不思議な気持ちになった。中国の学校では男女の制服に大きな違いがなく、みんな同じようにシャツにズボンをはいていた。けれど、日本の制服は、男子はズボン、女子はスカート。私もその一員としてスカートをはいて鏡の前に立った。スカートの裾を指先でそっと触れると、その布は少し冷たく、でも新しい世界への入口だと思った。そわそわしながら裾を直している自

分に気づいたとき、「ああ、ここから本当に新しい生活が始まるんだ」と実感した。同じ「制服」という言葉でも、文化によって形も意味も違う。その違いを着ることで体験するなんて、以前の自分なら想像もしなかったんだろう。また同じことを思った。「きっと、ここでも『少し違う』って思われるんだな。」緊張で心臓が小さく跳ねた。でも、その予想はすぐに裏切られた。

私のクラスには、いろんな国にルーツを持つ子がいた。両親のどちらかが外国出身の子、海外で暮らしていた子、家では日本語以外の言葉が飛び交っている子——みんな違っていて、それが当たり前の教室だった。新しいクラスで自己紹介をしたとき、ある子が私の発音を真似して笑った。でも隣の席の子が「私もドイツ語の発音変だって言われるけど気にしないよ」と肩をたたいてくれた。その一言が、小さな勇気になった。休み時間に、隣の席の子に「どこから来たの？」と聞かれたとき、私は少し戸惑いながら「中国だよ」と答えた。「へえ！ 中国語話せるの？ すごい！」返ってきたのは、あの頃のような冗談じゃなくて、ただのまっすぐな好奇心だった。

日本での生活が始まって数ヶ月が過ぎた頃、学校では文化祭の準備が始まった。私はクラスで出し物を決める会議に参加した。中国の学校では文化祭のような行事はなかったから、何をどう準備するのか、最初は全く想像がつかなかった。「中国にもこういうのあるの？」と誰かに聞かれたとき、私は少し考え込んだあとで、「学校ではあんまりないけど、家族や町でお祭りをするのは多いかも」と話すと、「じゃあ、中国らしいコーナーやろうよ！」と誰かが提案してくれた。私たちのクラスは、文化祭で「世界の文化体験ブース」を出すことになった。クラスメイトはそれぞれの国の衣装を着たり、伝統的な遊びを紹介したりして、訪れた人に楽しんでもらえるよう工夫していた。私は中国担当として、中国語の簡単なあいさつや名前の書き方を教えたり、中国の紙飾りと一緒に作ったりするコーナーを任せられた。紙を切って中国風の切り絵を一緒に作るとき、「こうやって飾るとお祝いの意味があるのだよ」と説明すると、みんなが「へえー」「知らなかった！」と楽しそうに耳を傾けてくれた。中国では当たり前に知っていた小さなことが、日本では新しい発見になる。私はそのことが、ただ嬉しかった。

父に教わった中国語のきれいな書き方を思い出して、筆ペンで友達の名前を漢字風に書いてあげると、「わあ、かっこいい！」「私も書いて！」と笑顔が広がった。隣のブースでは、韓国出身の友達が伝統遊びのユンノリを紹介していた。大きな声でルールを説明する姿はとても誇らしげで、私も思わず見とれてしまった。その横では、インドの友達が来場者の手に美しいヘナ模様を描いていた。会場全体がまるで小さな地球になったようで、私はそこに立っている自分が幸せだと思った。来場者に「こんな違いがあるんだ！」と驚かれたり、興味深そうに質問されたりすると、自分が異文化の中で悩みながらも学んできたことが、人にとって新しい発見になることを実感した。そして文化祭の一日が終わる頃、私はふと気づいた。「小学校の頃は“違う”ことに戸惑い、涙を流した自分がいた。でも今はその“違い”を楽しみ、共有できている。」文化祭を通して、私は再び世界のさまざまな文化に触れ、異文化の魅力を体験することができた。

この経験は、自分の過去の歩みを肯定し、未来に向けて異文化をもっと大切にしていこうという思いを強くしてくれた。

文化祭の後も、私は放課後に友達に頼まれて、中国語でのあいさつを教えた。

最初は冗談半分だった友達も、いつの間にか「次はこれ教えて！」と笑顔で言ってくれるようになった。
「中国に行ってみたいな」と誰かが言ったとき、私は喜んで「私が案内するよ」と答えた。

誰かが笑顔でそう言ってくれるたびに、私はあのとき机に作った小さな湖を思い出していた。あのときは涙だった水が、今は誰かとつながる扉になっている。これから先も、私はきっと二つの文化の境界線の上に立つ。でもそれは、どちらにも属せない不安ではなく、二つをつなぐ小さな橋のようなものだ。誰かに「違う」と言われた日々も、あの涙も、教室での笑顔も、全部が私の異文化体験の物語だ。

違いがくれた物語を、私はこれからも大切に抱えて生きていく。いつか、私の言葉や体験が、誰かが違いを怖がらずに踏み出す小さな勇気になればいい。そしていつか、誰かが自分の違いに迷ったとき、「大丈夫だよ。その違いがきっと誰かの扉になるから」と伝えられる人になりたい。

あのとき机に落ちた小さな湖が、今も私の心の奥で光っている。